

第1章 大阪万博について

1. 開催地の決定から大阪万博開催まで

(1) 万国博覧会の開催地の選定

万国博覧会(以下「万国博」とする)は、国際博覧会条約にもとづいて開催される博覧会である。条約では「博覧会とは、名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とする催しであって、文明の必要とするものに応ずるために人類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは二以上の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すもの」とされている。

近代的な博覧会の起源は、1761年、イギリスの王立美術工業商業振興会がロンドンで開催した博覧会とされる。嘉永4年(1851)にはロンドンで、各国の参加を求めるかたちで万国産業製作品大博覧会(The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations)が開催された。34ヶ国が参加、世界初の国際博覧会として知られ、のちに第1回の万国博として位置づけられることになる。

以後、欧州やアメリカ、オーストラリアなどの主要都市で同様に各国の参加を求める産業博覧会が開催される。昭和3年(1928)、フランス政府の提唱になる国際博覧会条約が35か国で締結される。それまでに開催された主要な国際博覧会をさかのぼって万国博として認めるとともに、以後の万国博の開催方法や年次に関するルールが定められた。

明治時代以降、欧米の万国博を巡視した政府関係者などによって、日本にあっても万国博の開催が必要であるとする意見が示される。第五回内国勸業博覧会を経て、その動きが活発になるが実現までには至らない。その後、昭和15年(1940)のオリンピックとの同時開催を前提に、東京での万国博の誘致に成功し関連工事などに着手するが、戦時下にあって実施までには至らない。本格的な誘致が再開するのは、戦後復興を経て、東京オリンピックののちのことである。

当時日本での開催に向けて、近畿地区では大阪府・大阪市のほかに滋賀県や神戸市、近畿圏以外では東京都、千葉県なども万国博誘致に動き始めていたが、最終的に大阪府、滋賀県、兵庫県 の3府県からの開催希望の申し出があったため近畿圏での開催が決定した。その後、3府県で調整が図られ、日本政府は会場を大阪千里丘陵とすることを決定した。政府は、昭和40年(1965)4月13日付の「開催申請書」をBIE(万国博覧会国際事務局)に提出し、同年9月14日に正式に開催が決定した。

会場となった千里丘陵は、大阪府の北摂地域に位置する。土地は、起伏が多く未開拓地であったため昭和25年頃(1950)までは一帯が農村地帯であったが、大阪の中心部や京都、神戸などの大都市からの距離が近く、東日本と西日本とを道路で繋ぐ地点であり、また鉄道や空路などの交通の便が良いなどの点から、丘陵の一部は昭和35年代(1960)に千里ニュータウンとして開発が行われている。

大阪万博開催予定地については、昭和42年(1967)1月から工事着手に伴う準備が始まり、同年3月15日に起工式が行われ、その後本格的な造成工事が開始された¹⁾。

¹⁾ 日本万国博覧会公式記録第3巻、日本万国博覧会記念協会、昭和47年3月1日



図 1-1 開発前の千里丘陵

(手前：大阪万博開催予定地、奥：千里ニュータウン)



図 1-2 造成中の大阪万博開催予定地

(2) 大阪万博開催に向けた交通インフラの整備

大阪万博開催地の決定後、開催地の造成工事と同時期に会場までのアクセスを考慮したインフラ整備が行われている。

大阪では万博開催決定前から、都心部での人口過密と車社会への対応が大きく、都心部の機能をいかに郊外に分散するかが課題となっており、戦後復興計画（大阪地方計画 第1次報告 1962）として既に道路、鉄道、上・下水道、土地利用などの整備計画が盛り込まれていた。道路に関しては、十大放射道路（中心市街地から各方面に抜ける道）と三環状道路（内環・中環・外環）を整備し、道路が交差する地点に住宅地や工業地帯などの都市機能を持たせる計画が含まれており（図 1-3）、万博における交通インフラ整備と併せて実施できる部分は先行して進められ、大阪万博の会期中にのみ使用されるインフラは開催に間に合うよう整備が行われた。

大阪万博開催を目的とした関連事業のうち、交通機関としては道路整備、鉄道、空港、港湾などの整備・新設、環境整備としては、周辺地域の観光客増加を想定したホテル建設や公園の整備、河川・下水道の整備等が行われている。



図 1-3 大阪地方計画（第1次報告、1962）による地帯構想図

道路整備では、周辺の主要道路である国道の拡張整備や立体交差化、周辺地域のバイパスの建設が行われた。地方道については、交通量の増加を見越して大阪中央環状線や大阪市域の外周部を通る大阪内環状線の建設が戦後復興計画を前倒しして行われた。また、会場まで通じる道路のうち、大阪国際空港（伊丹空港）から大阪中央環状線までの間に大阪池田線を開通させた。また、大阪市の都心部と新大阪・千里ニュータウン・国道 171 号線を結ぶための道路として御堂筋線の建設が行われた。

鉄道に関しては、当時大阪市内では市営の路面電車が交通インフラであったが、交通渋滞を原因に全廃され地下鉄の整備が進められた。当時梅田から南千里まで京阪神急行電鉄（現在の阪急電鉄）が運行していたが、大阪万博の開催を機に南千里から北に位置する北千里駅まで運行区間を延長するとともに、新たに「万国博西口駅」が設置された。大阪市高速鉄道は、新大阪駅から北に位置する江坂駅までの線路を新設していたが、江坂駅から「万国博中央口駅」までは北大阪急行電鉄により路線が新設された。大阪万博閉幕後には、6 ヶ月の万博開催期間のためだけに建設された北大阪急行電鉄の「千里中央駅（仮駅）」から「万国博中央口駅」までの軌道は撤去され、京阪神急行電鉄千里線の臨時駅であった「万国博西口駅」は閉鎖された。

その後、昭和 48 年（1973）に当時の万国博西口駅付近に「阪急山田駅」が開業し、平成 2 年（1990）には現在の大阪モノレールが開通した。

海外からの玄関となった大阪国際空港（伊丹空港）は、大型ジェット機が離着陸できるよう 3,000m の滑走路の新設と空港ターミナルビルの建設が行われた。また、大阪港や神戸港では、大型客船の入港に備えて岸壁の整備や旅客上屋の新設が行われた。



図 1-4 対象地周辺における鉄道計画図

(出典：『日本万国博覧会公式記録第 3 巻』日本万国博覧会記念協会，昭和 47 年 3 月 1 日、一部加工)

(3) 大阪万博の概要

大阪万博は、「人類の進歩と調和 (Progress and Harmony for Mankind)」というテーマを掲げ、昭和 45 年 (1970) 3 月 15 日から 9 月 13 日の約 6 か月間 (183 日間) にわたり開催された。

大阪万博には日本のほか、海外からは 76 カ国、4 国際機関、1 政庁 (香港)、6 州 (アメリカ 3 州、カナダ 3 州)、3 都市 (アメリカ 2 都市、ドイツ 1 都市)、国内からは 32 団体 (日本政府、日本万国博覧会地方公共団体出展準備委員会、2 公共企業体、28 民間企業等) の参加があった。

会場面積は 330ha の広さを有し、場内はシンボルゾーン、外国展示館、国内展示館、日本庭園、エキスポランドの 5 つのゾーンに整備された。会場の中央にシンボルゾーンを据えて、左右に外国展示館と国内展示館、北側に日本庭園、南東にエキスポランドを配置した。

シンボルゾーンは、丹下健三設計の大屋根がかかり、中央部の開口部から岡本太郎プロデュースの太陽の塔が上半身をのぞかせる。太陽の塔の後方にはお祭り広場が設けられており世界各国の様々な民族芸能やパレードが連日行われた。

日本庭園は、25ha の広さを有し、東西 1,300m、南北 200m の細長い地形を成す。庭園は西から上代 (平安時代)、中世 (鎌倉、室町時代)、近世 (江戸時代) と 3 つの時代を代表する庭園様式を模した庭と現代の庭園様式を含めて作庭されており、庭園内には汎庵と万里庵、千里庵

の3棟の茶室が建てられている。また、庭園の西側には海外からの要人を接遇するための施設として迎賓館が建てられた。

各国や企業など116館（テーマ館：大屋根・太陽の塔、日本庭園は除く）の展示館が造られたが、なかでも人気を博したのは「月の石」「人工衛星」などを中心とする宇宙科学の展示を行っていたアメリカ館やロシア館であった。

会場は330haと広がったこともあり、場内の移動には、モノレールや動く歩道、ロープウェイなど当時の最新技術を活用した場内輸送装置が設けられていた。会期中は多くの来場者で賑わい、万国博史上最高となる入場者数6421万8770人を記録した。



図 1-5 大阪万博開会式



図 1-6 大阪万博会期中

太陽の塔はシンボルゾーンのなかでも中核を担う存在であり、ひいては大阪万博の象徴であった。また、テーマ展示のコンセプトである「人類の過去、現在、未来を貫き、空中に吹きあげるエネルギーの象徴」であるとともに、地下展示と大屋根の空中展示を結ぶ来館者用の動線としての役割を担った。太陽の塔は大規模な展示物であり同時に内部に展示空間を有するパビリオンでもある。大阪万博における単なる象徴としてだけでなく内部を展示空間として利用できるようにした極めて稀な巨大建築物である。



图 1-7 大阪万博会場図



图 1-8 大阪万博全景（西側上空より撮影）

2. 大阪万博閉幕後から現在まで

(1) 大阪万博跡地における活用

これまで開催されてきた万国博では開幕前から跡地利用について検討されており主に公園や博物館など市民が利用できる場として整備されることが多かった。

大阪万博の跡地利用については、開幕以前から日本万国博覧会後処理委員会および万国博覧会跡地利用懇談会（以下「懇談会」とする。）によって議論が行われていた。

千里丘陵は、名神高速道路・中国自動車道・近畿自動車道・中央環状道路などの幹線道路が集結する交通の要所であったため、大阪府としては大阪万博跡地に都市機能を持たせたいと考えていたが、万博閉幕後の昭和45年（1970）12月の懇談会にて以下ア～ウの方針が示された。

ア 跡地は統一した計画に基づき一括して利用する

イ 全域を「緑に包まれた文化公園」とする

ウ 具体的な計画は時間をかけてマスタープランを作成し逐次実現する

結果、跡地を4つのゾーンに分け、シンボルゾーンの東側は万国博開催を記念する地区とし、西側は子供や家族、青年の地区、北側一帯を日本庭園地区と森林地区とした。これら4つの中枢的地区として池を活用し、東西・南北の周辺は大阪万博を記念する広場とすることが決定された。

また、跡地利用と合わせて建造物の利活用についても検討されていた。「日本万国博覧会一般規則」によると万博開催に伴い建設された仮設建築物は通常閉幕後6ヶ月以内の撤去が原則となるが、鉄鋼館や日本民芸館、迎賓館、茶室を含む日本庭園、日本万国博覧会記念協会本部ビルなどの建造物については存置が決定されていた。太陽の塔は、建設当初は仮設建築物であったため撤去の対象であったが、その後、撤去に対する反対や住民運動が起こったため、昭和50年（1975）に永久保存が決定された。

(2) 万博記念公園内に現存する関連施設の保存状況

万博公園内には太陽の塔のほか、EXPO'70パビリオンや大阪日本民芸館、迎賓館、茶室、万博記念ビルなど大阪万博当時の建造物が今も残り、公開活用されている。

本節は、万博当時の建造物及び工作物を抽出し、主要な建造物については保存状況について記載する。

[建築]

位置 No	名称 (大阪万博当時の施設名称)	構造及び形式等	備考
1	太陽の塔	鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造及び鉄骨造、地上2階地下1階建て、建築面積491㎡	デザイン：岡本太郎 設計：集団制作建築事務所 施工：(株)竹中工務店
2	EXPO'70パビリオン (鉄鋼館)	鉄筋コンクリート造、地上5階地下1階建て、陸屋根、建築面積3,567㎡	設計：前川国男 施工：(株)大林組等
3	大阪日本民芸館 (日本民芸館)	鉄筋コンクリート造、平屋建て（一部2階建て）、建築面積1,695㎡	設計・施工：(株)大林組

位置 No	名称 (大阪万博当時の名称)	構造及び形式等	備考
4	万博記念ビル (日本万国博覧会記念協会 本部ビル)	鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造) 地上4階地下1階建、塔屋付、建築面積 55,183 m ²	設計:根津建築設計事務所 施工:(株)鴻池組等
5	迎賓館 (日本庭園 迎賓館)	鉄筋コンクリート造、地上2階建て(一 部中地階)、建築面積1,802 m ²	設計:(株)彦谷建築設計事務所 施工:(株)藤木工務店
6	茶室 汎庵 (日本庭園 茶室 汎庵)	木造、平屋建て、檜皮葺(一部瓦葺)、建 築面積216 m ²	設計:仙アートスタジオ 施工:中村外二工務店
7	茶室 万里庵 (日本庭園 茶室 万里庵)	木造、平屋建て、檜皮葺(一部瓦葺)、建 築面積35 m ²	設計:仙アートスタジオ 施工:中村外二工務店
8	あずまや (1号棟休憩所)	木造、平屋建て、銅板一文字葺、建築面 積88.36 m ²	設計:増田友也研究室
9	茶室 千里庵 (2号棟休憩所 千里庵)	鉄骨造、平屋建て(一部地階)、鉄板葺、 建築面積389.08 m ²	設計:増田友也研究室
10	中央休憩所 (3号棟中央休憩所)	鉄骨造、地上1階地下1階建て、銅板 葺、建築面積958.72 m ²	設計:増田友也研究室
11	正門管理棟 (4号棟管理棟)	鉄骨造、平屋建て、銅板葺、建築面積 463.36 m ²	設計:増田友也研究室
12	観魚休憩所 (5号棟鯉池休憩所)	鉄骨造、地上1階地下1階建て、亜鉛鉄 板瓦棒葺、建築面積460.89 m ²	設計:増田友也研究室
13	水上あずまや (6号棟蓮池休憩所)	鉄骨造、平屋建て、亜鉛鉄板瓦棒葺、建 築面積169 m ²	設計:増田友也研究室
14	展望休憩所 (7号棟休憩所)	鉄骨コンクリート造、地上1階地下1階 建て、銅板一文字葺、建築面積267.45 m ²	設計:増田友也研究室
15	便所:2箇所 (便所棟)	鉄筋コンクリート造、平屋建て、アスフ ルトシングル葺、建築面積62.08 m ²	設計:増田友也研究室

※上記大阪万博当時の名称のうち庭園内の建造物については、『日本庭園一万博日本庭園造庭誌』万国日本庭園造庭誌編輯委員
会、昭和55年9月15日による

[工作物]

位置 No	名称 (大阪万博当時の名称)	構造及び形式等	備考
16	お祭り広場の大屋根 [一部]	鋼管立体トラス	設計:丹下健三
17	エキスポタワー [一部]	鋼管構造	設計:菊竹清訓
18	噴水《宇宙船》	高さ3m、直径3m	設計:イサム・ノグチ
19	噴水《星雲》	高さ12.50m、直径3mの円筒	設計:イサム・ノグチ
20	噴水《彗星》	高さ33m(池面上)、1辺6.44mの立方 体を取り付く	設計:イサム・ノグチ
21	噴水《コロナ》	高さ5m(池面上)、1辺4.5mの立方体 を取り付く	設計:イサム・ノグチ
22	噴水《惑星》	高さ7.40m、幅6.90m	設計:イサム・ノグチ
23	噴水《月の世界》	直径4m	設計:イサム・ノグチ

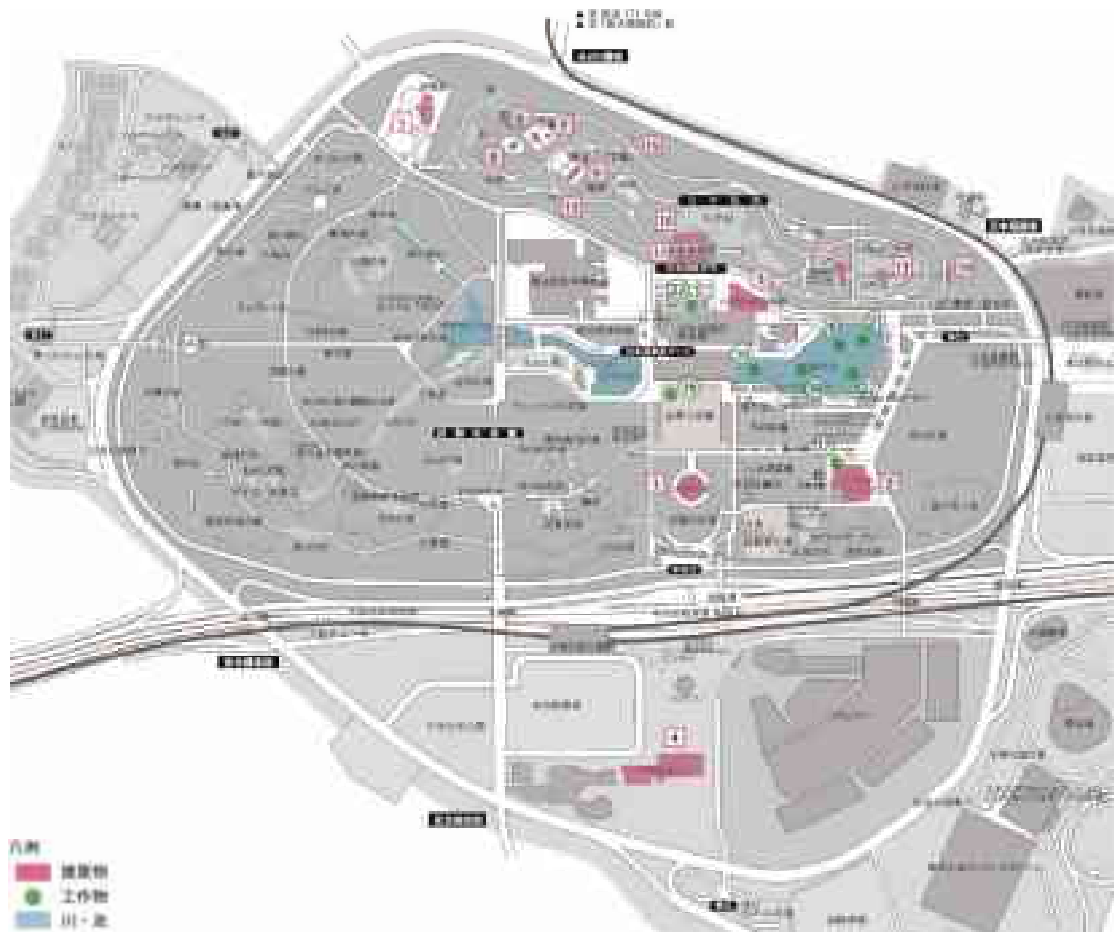


図 1-9 園内に現存する大阪万博当時の建造物・工作物

① EXPO'70 パビリオン（鉄鋼館）

鉄鋼館は、大阪万博閉幕後も残置する施設として建設された建物である。構造は、鉄筋コンクリート造、地上5階地下1階、建築面積3,567㎡、延床面積8,210㎡の建物で、設計・監理は前川国男建築設計事務所、施工は大林組、鹿島建設、清水建設、大成建設、竹中工務店の5社のJV（ジョイントベンチャー）による。

平成21年度(2009)に公開に向けた改修工事が行われ平成22年(2010)3月13日からEXPO'70パビリオンとして大阪万博の史料を展示・体験できる施設として公開されている。

内部は、大きくホワイトエトスペースシアターホールと呼ばれる空間で構成されており、前者では広い空間を活かし企画展などを実施し、後者では光と音楽の展示が行われ当時の鉄鋼館での展示を体験できるスペースとなっている。また、令和5年(2023)には、EXPO'70パビリオンの南側に別館が増築された。

現在施設の所有者は大阪府であり、管理は指定管理者（万博記念公園マネジメント・パートナーズ）により行われている。



図 1-10 外観



図 1-11 スペースシアターホール

② 大阪日本民芸館（日本民芸館）

日本民芸館は、庶民の暮らしの中で培われた民芸品を広く海外に理解してもらうことを目的に建設された国内展示館である。構造は、鉄筋コンクリート造、平屋建て（一部 2 階建て）の建物で、三角形の平面を有しており中央には石敷の中庭を設ける。設計・施工共に大林組による。

万博閉幕後、建物を引き継ぎ昭和 46 年（1971）に大阪日本民芸館（以下「民芸館」という。）として開館している。現在は大阪府の所有となり公益財団法人 大阪日本民芸館が施設の管理を行っている。

展示室は、万博開催時から変わらず回廊式としており、展示ケースや休憩用の木製ベンチなども当時のものを使用している。また、建物には当時のスチール製のガラス戸やガラス窓などの建具が残り、現在も使用されている。



図 1-12 外観（西面）



図 1-13 外観（中庭）



図 1-14 内部（展示室）



図 1-15 内部（展示室）

③ 迎賓館

迎賓館は、万博会期中に海外からの要人を接遇するための施設として建設された。構造は鉄筋コンクリート造、地上2階建て（一部中地階）、建築面積1,802.73㎡の建物である。

外観は、柱や梁などはコンクリート打ちっぱなしとし、プレキャストコンクリートルーバーを設ける。

内部は入口を入ると天井高3.75mの玄関ホールとロビー・ラウンジが一体となった空間が広がり、ラウンジ脇の階段を上るとレセプションホールに続く。外部に面する壁面の大半にはガラスを採用しており採光を意識した明るい造りとしている。特に、迎賓館という用途から出入口付近の壁面に使用されるガラスには防弾ガラスを使用するなど安全面にも配慮したつくりとしている。建物は大阪府の所有であるが管理は民間企業が行っており、現在は結婚式場や宴会などで利用されている。



図 1-16 外観（西側 正面入口）



図 1-17 外観（東側）



図 1-18 内部（玄関ホール）



図 1-19 内部（ラウンジ）



図 1-20 バルコニー



図 1-21 万博当時の照明器具

④ 茶室（汎庵・万里庵・千里庵）

茶室汎庵と万里庵は迎賓館と同じく大阪万博の会期中に国内外からの要人（特に御婦人）の接客施設として建設され、京都商工会議所により寄贈された建物である。茶室の施工は中村外二工務店による。汎庵は書院風の茶室で、木造、平屋建て、屋根は切妻造・瓦葺、庇は檜皮葺、建築面積は 216 m²である。万里庵は草庵造りの茶室で、木造、平屋建て、屋根は檜皮葺、建築面積は 35 m²である。2 棟の茶室は、庭園のなかでも中世地区²⁾ に建てられており、互いに添景となるように配置されている³⁾。現在施設は、春や秋の紅葉の時期にあわせて特別公開を行っており、呈茶やコンサート、ライトアップなどが行われている。

現在施設は大阪府の所有であるが管理は指定管理者によって行われている。

この他に中世地区には千里庵という鉄骨造、平屋建て、鋼板葺の茶室が建つ。建築面積は 389 m²である。本茶室は枯山水の庭を有しており、室内に設けられた大きな開口部から庭を眺めることができる。室内は茶立て側を畳敷き、客側を立礼席とする。

なお、茶室が建つ日本庭園は、令和 6 年（2024）6 月に国の登録記念物（名勝地関係）として登録されることが決まった。



図 1-22 汎庵 外観



図 1-23 万里庵 外観



図 1-24 汎庵（左）と万里庵（右奥）



図 1-25 汎庵 立礼席

²⁾ 日本庭園は万博公園の北側に位置し、面積は約 25ha（ヘクタール）を有する。庭園は東西 1,300m と細長く、西から上代地区（平安時代 8 世紀～12 世紀）、中世地区（鎌倉・室町時代 12 世紀～16 世紀）、近世地区（江戸時代 17 世紀～19 世紀）、現代地区と時代ごとの庭園にて構成される。汎庵・万里庵は 2 つ目の中世庭園内に建てられている。

³⁾ 汎庵と万里庵は中村外二工務店の施工による。汎庵の掲額は当時の内閣総理大臣佐藤栄作の直筆であり、万里庵は「万」は表千家の家元「千宗左」、「里」は裏千家の家元「千宗室」の直筆。



图 1-26 汎庵 広間



图 1-27 万里庵 水屋



图 1-28 千里庵 外觀



图 1-29 千里庵 枯山水